法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-12-13

学芸員のライフサイクルに関する一考察 : 学芸員23人の面接調査より

KANAYAMA, Yoshiaki / 金山, 喜昭

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
91
(終了ページ / End Page)
100
(発行年 / Year)
2010-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007571

Hosei University Repository

学芸員のライフサイクルに関する一考察

―学芸員23人の面接調査より―

法政大学キャリアデザイン学部教授　金山　喜昭

はじめに

学芸員という職業のキャリア研究はこれまでほとんど未着手であった。金山は、22人の学芸員の面接調査により、児童・青少年期の生活歴やパーソナリティの検討によって、ホランドの「六角形モデル」と矛盾することがないことを明らかにした[1]。そこでは対象者が学芸員になるまでのことを主題にしたが、その後に学芸員として働くなかでの経験を通じて、そのキャリアを検討することをしなかった。学芸員のキャリアを考察するためには、その職業に就いてからの経過を対象とすることが課題となっていた。そこで本稿は、前回に課題として提起したようにトランジションの視点から学芸員のキャリアを考察することにする。

キャリアを考える上で大事な点は、人生の「節目」に着目することである。それは「移行期」や「転機」などとも呼ばれる。トランジションについては、W. ブリッジズ[2]、D. レビンソン[3]、E. エリクソン・J. エリクソン[4]、E. シャイン[5]などが、それぞれトランジションのサイクル・モデルを提唱している。ブリッジズは、「トランジションは人生における発達過程といえる。“終わり”から“始まり”に進むパターンは人が変化し成長する過程を表している」とする[6]。レビンソンはそれをライフサイクルとして人生全般の各段階に適応させて、人生を出発点（誕生、始まり）から終了点（死亡、終わり）までの過程とした旅にたとえ、一般共通の一定のパターンがあるとした上で、それには季節のように一連の時期または段階に分けてとらえることができるとした[7]。

レビンソンは成人男性40人（工業労働者、企業の管理職、大学の生物学者、小説家）を面接調査して、全体的に共通する特性を見つけ出すことに取り組んだ。その結果は、成人期には発達期はない、あったとしても発達のペースは人によってペースは異なり年齢とも関係がないという従来の仮説とは、完全に異なるものであった。レビンソンの見解を踏まえて、博物館学芸員のキャリア発達を考えることは、職業別キャリアを研究する観点からも意義のあることである。

レビンソンは、成人期の発達期の移行について次のように述べている。「成人の発達は“成人への過渡期”（17歳～22歳）から始まる。これは青年期から成人前期への橋渡しの時期である。そのあとに続くのが“おとなの世界へ入る時期”で、22歳頃から28歳まで続く。この時期の主要課題は、成人初期の主要課題をつくり上げることである。この生活構造は“30歳の過渡期”に修正される。“一家を構える時期”（33歳～40歳）には成人期第二の生活構造を築き、成人前期の最盛期を迎える。40歳から45歳にかけての“人生半ばの過渡期”と中年期をつなぐ役割を果たす。このあと40歳代半ばから後半にかけてはもっと安定した時期が訪れ、中年期最初の生活構造が築かれる。」[8] つまり成人期の生活構造の発達は安定期と過渡期が交互に現れて進んでいく。安定期の主

Hosei University Repository

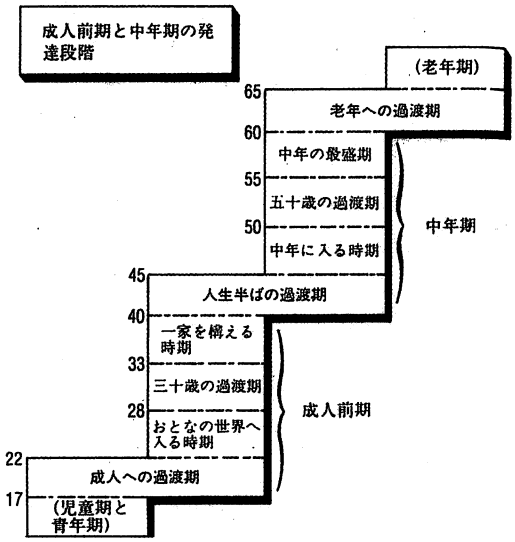
要な発達課題は生活構造を築くことであるが、それには生活の中心的な要素になる職業、家庭などをどのように選択して、それを中心に生活構造を作りあげて、自分の目標と価値観を追求するかにある(9)。

レビンソンが定義する4つの各発達段階は次の通りである。

1. 児童と青年期　0～22歳
2. 成人前期　17～45歳
3. 中年期　40～65歳
4. 老年期　60歳以降

それは図1に示すとおりである。レビンソンは、ある発達期から次の発達期への移行は決して単純ではなく、生活構造を根本的に変える必要を伴うもので、それには4～5年かかり、人によっては6年以上かかる。発達の過渡期は、去りゆく時期を終えて、次の段階の人生に入る境界域を意味しているという。

図1



出所：ダニエル・レビンソン；南博訳（1992）

1　目的と方法

本稿は、学芸員という職業に焦点をあてて、レビンソンのいうライフサイクル（児童～老年期）の＜成人前期＞について、その人たちの人生に発達が見られるとすれば、その発達過程を明らかにすることである。この＜成人前期＞は「新米時代」とも言われるが、それを構成する「成人への過渡期」、「おとなの世界に入る時期」、「30歳の過渡期」について検討する。対象者は、前回の22人にさらに1人の学芸員の面接調査のデータを追加して23人とする。その主な質問項目は次の通りである。調査は進路や仕事面についての聞き取りが主で、私生活についてはほとんど聞き取りを行うことをしていない。

○博物館の種類・性別・生年・職位
○子ども時代の興味や関心事は何だったか？
○職業（学芸員以外の初職を含めて）の方向性を決める上で影響を受けた人がいるか。それはどのような人か？
○進学や大学での専攻理由は何か？
○大学生活をどのように過ごしたか？
○どのようにして学芸員になったか？
○学芸員としての仕事の内容？その中での「やりがい」や「つらさ」は何か？
○仕事のなかで最も関心のあることは何か？
○学芸員を目指す人たちへのアドバイス？

2　面接調査した学芸員の経歴概要

追加した学芸員の概要は次の通りである。他の22名の学芸員についての概要は前回示したとおりである(10)。

市立博物館　男性　館長　1947年生

子どもの頃から、自然と触れ合うことが好きであった。小学4年生の頃から昆虫採集を始めて図鑑で調べることなどに熱中する昆虫少年であった。中学時代は生物部に入り、高校時代を通して、休みの日には山小屋で過ごして植物の観察や写真を撮るなどした。博物館には中学生の時から通い始めて、高校3年生の時には春休みに昆虫標本の整理などを経験する。大学は国立大学で生物学を学ぶかたわ

Hosei University Repository

ら、博物館の学芸員が主催する自然保護の会にも参加して地域の自然保護活動に関わる。大学院に進学するが、大学紛争の中で大学での研究活動に失望して、地域の自然保護活動を通じて地域での仕事に関心をもつ。大学院修了後、市立博物館の準備室に学芸員として就職する。準備室段階から同僚たちとの議論によって市民サービスを目標にした博物館をめざし、さらに市民参加による博物館へと進化発展させていく。

3　成人への過渡期

この時期は17歳から22歳までで、その発達課題はレビンソンが述べるように、「青年期と成人期の両方にまたがり、両時期の橋渡しをする。この時期の青年は半分少年で半分成人である。未成年の世界にいる未成年の自己に終わりを告げようとしている。それと同時に、おとなとしての自己を形成しはじめ、初めておとなの世界の一員となるための選択を始める」(11)。これは大学生時代に相当する時期である。大学院の修士課程修了者は25歳ごろになるのでその年齢までを含めることにする。面接調査した23人の最終学歴は、学部卒業者14人、大学院修士課程6人、博士課程1人、海外留学者2名である。

初めておとなの世界に入る準備は、次の＜成人前期＞に入る準備段階への第一歩を歩むことを意味する。この時期には大学生活のために下宿生活を送る者が出てくる。親元から離れて生活することで経済的に少しずつ親からの援助が少なくなり、精神的にも親への依存度は減っていく。調査した23人中7人が学生時代にそうした経験をしているし、さらに2人は海外の大学院に留学している。歴史博物館学芸員は在学中に大学図書館に勤務した給料を生活費に充てていたし、財団美術館学芸員は卒業後に「これ以上親の面倒にはなりたくない」など、親元から離れて自活することによって精神的に自立する様子をみることができる。

また、この時期には大学院生の時に精神的な不安定になっている者もいる。県立自然博物館学芸員は、大学院修士課程1年生の時に1ヶ月ほど現実逃避をして周囲との連絡を遮断したことがあった。その理由については研究への行き詰まりや、周囲からの期待がプレッシャーになったという。誰にも相談せずに一人で苦悩を抱え込んだ。しかし、一時的な「引きこもり」は自分を見つめ直す機会となり、まもなくして立ち直っている。

また、この時期の特徴として職業を志望することもあげられる。この時期に職業の志望を明確にしたのは、23人中22人で大部分の人たちは来たる＜成人期＞をめざして職業選択をはかっている。その期間は大学生時代や卒業間際のこともあれば、大学院に進学してからの場合もあり時間幅がある。それは博物館や美術館に就職を希望する者ばかりでなく、新聞記者、教職、民間企業などもいる。

この時期に学芸員を志望した人たちは23人中12人である。その理由としては、博物館での全般的活動に関心を持った者が7人である。県立美術館課長は、フランス留学のときに経験した美術館の革新的な変化に魅力を感じた。当時はポンピドゥー・センターがオープンした頃で、そこは総合文化センターというべきもので巨大図書館があり、展覧会も美術、音楽、演劇、文学、政治思想みたいなものを全部が網羅するような企画が次々と行われており、大学よりも格段に関心をもったという。区立美術館学芸員は、美術大学で画家を志していた。「学芸員実習やっている時に、もう密かに画家じゃなくて、自分は学芸員のほうに向いているんじゃないかっていう、漠然と思い始めたんですね」と、学芸員への関心を示している。また市立歴史博物館学芸員のように「（大学で）博物館学の授業を1年間通して聴いているうちに、幼少の頃の科学博物館でのこと、図鑑を見ているのが好きだったこと、ものを集めるのが好きだったこと、新聞を書くことなど、自分の今までの経験をまとめると、総合的に博物館学で言っているようなことだと思いました。博物館というところに勤めたいと。勤めるというところまでいかなく

Hosei University Repository

ても、なんとか関わりたいと非常に強く思いました。」というように、20歳頃に自己発見し、学芸員という仕事に就くことを目標にしている。

あるいは専門研究に従事したい理由で学芸員を志望した人たちは3名いる。財団美術館課長は、神仏習合の美術についての研究を博物館でさらに進めたかったという。さらに、個別博物館そのものに関心をもった者が1名である。「(学生時代に)日本近代思想史というか民衆史のゼミを取ったんです。ゼミの発表で、誰か独自の学問をひらいていった民間学者を選んで発表するんです。そのときに、出逢ったのが柳宗悦という人間なのです。高校からどこかにひっかかっていたんですね。それで興味を持って調べたら、この人は(個人美術館)をつくったひとじゃないかっていうことがわかったんです。それでその人がつくった(個人美術館)を訪ねてみたいと思ったんです。これは大学3年の頃でした」。彼の場合は、人物にあこがれて、彼が関わりをもった美術館そのもので仕事することを希望している。

逆に、この時期に博物館や学芸員に関心を持たなかった、あるいは漠然として特に関心をもたなかった人たちは23人中9人いる。財団歴史博物館事業企画課長は、「学生時代には博物館、美術館に全然行ってない。興味が無かったんです。(ユーラシア大陸を車で走破した時期に)ペシャワールの美術館なんてね、世界的に有名な美術館ですけど殆ど行ってないです。寧ろバザール行ったりしました。パリに行ってもルーブル美術館にも行かなかったんですよ。ですから学芸員の資格も学生時代に取っていない」というようにこの時期には博物館に全く関心を払っていなかった。また私立歴史博物館学芸員は、大学3年生の時に海外の博物館に行きコレクション調査をするが、出版関係の仕事を希望した。

調査した23人の学芸員は、この時期に全ての人たちが学芸員を志望したわけではなったことが分かる。学芸員以外に教職、文化財研究所、新聞記者などを志望しているように大多数の者はなんらかの職業を志望している。<成人への移行期>に青年と成人の境界域からおとなの世界への第一歩を踏み出すことで、この過渡期を終えている。この時期には、青年は成人期との中立に位置するが、次第に自立的になることによってこの過渡期を終えることになる。

4 おとなの世界に入る時期

この時期の発達課題は、「大切な自己とおとなの社会との間をつなぐ働きをする仮の生活構造を形づくる」ことであり、自分のホームベースをもった新米のおとなの仲間入りをしなければならないとし、職業、結婚、仲間との付き合い、価値観、生活様式などについて、はじめての選択を試す時期でもある[12]。他方、この期間は、依存的な子どもだった時期から自立した大人の変容する経過である。ブリッジズにいわせればこの時期は「居場所探し」だという[13]。人は、「何をするのか」を自問し、自分を生かせる場所を見つけることに努力し、一人立ちしていく。しかし、それは決して平坦な道のりではなく、仮の世界のようなもので絶えず模索することになる。

職業を選択することは、この時期の主要な発達課題である。調査した学芸員にとって職業を選択した理由は、児童期や青年期までの経験に由来することが多い。財団美術館課長は「神仏習合美術をやりたい」、市立科学館学芸員は、「星のことがやりたかった」、市立博物館館長は「地域の中で仕事がしたい。博物館にはチャンスがあれば仕事としたい」、県立総合博物館学芸部長は、「これまで学生時代に参加してきた自然保護運動の延長上の仕事ができるかもしれない」などである。このことは、成人前期をスタートさせるための予備的段階である。

学芸員という博物館専門職に対する能力については、どのように自己評価をしているのだろうか。財団美術館課長は卒業論文「修験道」に打ち込んだことを述べているし、市立科学館学芸員は天文少年としてのキャリアや知識に自信をもっている。県立美術館課長はフランス留学でヨーロッ

Hosei University Repository

パ近代絵画を学んだこと、市立歴史博物館学芸員は教育普及や演出力に自信をもっていることなどがあげられる。学芸員という職業を選択する動機や能力は、そもそも児童期や青年期に遡ることになる。彼らは天文少年、美術や自然が好きで、中学生では新聞づくりに熱中してアイディア開発に磨きをかけ、塾講師で教育力を高めるなどしていた。このように<成人への移行期>は、職業として博物館学芸員を選択する上での前段階にあるが、そこに辿りつくまでには児童・青年期の経験が由来している。

調査した23人のうち、学芸員やそれに関連する職業に就いた平均年齢は27歳。学部卒業後に就職するまでの期間（大学院期間を含める）は平均4年である。学芸員は企業に勤める人たちが学部新卒者22歳～23歳であることに比べれば、専門職であることから就職年齢は4～5年ほど遅くなる。この間に大学院で学び、博物館関係のアルバイト経験や、他の職業からの転職などをしている。

大学や大学院修了直後（大学院中退者を含む）にストレートに就職した人たちはどれぐらいだろうか。調査した23人中で博物館関係の正規職員になった者は13名であり半数以上を占める。それには、学生時代にアルバイトをしてコネクションをつけていることや、大学教員の推薦などが影響している。博物館関係の採用は、採用数が少なく流動性も低いことなどから、一般企業の募集のように試験と面接だけで採用することはまれである。この人たちにとって、この時期は仕事にとっても模索期となっている。面接調査で明らかになったことは、希望する学芸員に就職しながらも、この時期に理想と現実の乖離によって、2人が離職を考えていたことが分かった。

県立美術館課長は留学経験をもち美術館に就職したが、職場環境が劣悪なことに、自分が理想とする海外の美術館との違いに驚き離職を考える。「学芸員の机がひしめき合っていて。図書室はいっぱいだから、ほとんどの文献はダンボールに詰めて、他の倉庫とかに送り何にもないんですよ。ヨーロッパはルーブルにせよポンピドゥーにせよね、これはドキュメンテーションの部門もきっちりあって、学芸員がいて、制度として研究しています。美術館の人たちは、非常に優秀な人たちが多くて、著作も多いのですが、その人たちがやっている研究は自費でやっており公のお金は投入されてない。転職も考えました」。これに対して、推薦者の大学教員（恩師）が自分もフランス留学から帰国して国立美術館に勤めたときも同じようなものだったから5年間はそこで踏みとどまり、そのあとでどうしても耐えられなければ転職してもかまわない、その間に何が自分にできるかを探すことが大事だという助言を受けている。本人は、その後に大学や国立の美術館から転職の誘いがあったときに心動かされたが、どこでも日本の研究環境は非常に劣悪であって同じだというのが分かるようになってきた。それならば、その美術館は労働環境としては自由であり、美術館の展覧会とか色々な業務の質を上げることが思い通りにできることに魅力を感じていたので受け入れることができるようになったという。恩師からの助言により現実を受け入れて、自己開発をはかることができるようなったわけである。

また財団美術館課長は、「（神社博物館は）イメージと現実とは全然違った。やはりやめたかったですね。なんかこう閉塞感はありましたから。将来が見えないみたいな。もぎりみたいなことやっていた女性がいたんですけどすぐやめた。しばらくはそのもぎりと事務を全部兼務していました。苦しかった二十歳代ですね。しかし仕事が終わって帰って、自分の好きな本が読めるって言うのが救いでした。とにかく休みの日は本屋に行って買って来てそれを読むというような毎日だったんです。今から思うとためになったんですね。なったけどもやっぱりけっこうつらかったですね。ためになったのは我慢という点ですかね。あとは四季の移り変わりを肌で感じたということですね。毎年毎年こう季節が来てちゃんとそれをお掃除しなきゃいけないけど、台風で荒れ狂った後の葉っぱを、掃除するんです。最初はいやだった

Hosei University Repository

んですけど、段々なんかこう達観して来たんです」という。やはり、現実と理想のギャップから辞めたいと思ったが、読書と自然に親しむ環境のなかで、次第に達観できるようになった。修行僧の心境ともいえる。

または、第一希望の職業への憧れを断ち切れずに就職したために後悔した人たちが2人いる。財団歴史博物館学芸課長は国立の文化財研究所の研究員を希望していたが、採用試験に惜しくも不合格となり、郷里の教職採用試験を受けて合格する。教職志望に転向したが、それまでの文化財保護活動（歴史研究・発掘）を評価されて新設した県の文化財保護課に配属された。「正直なところ、一年間は国立文化財研究所に戻りたくてしょうがなかったんです。文化財保護課を辞めて、もう一回、文化財研究所でアルバイトをして勉強しなおしたいといったら親しくしている研究所の人に怒られました。」というように苦境にあったことが分かる。しかし研究所の上司がメンターとして忠告を受けて離職を踏みとどまった。

私立歴史博物館学芸員の場合も、やはり大学教員の推薦によって、合格しないと思って受験した博物館採用試験が合格して採用されている。この場合はほとんど動機をもたず、博物館就職への自己能力や意味づけなどを自己評価しないまま就職した。「最初の何年かはやっぱり教員試験を受けなおそうかとも考えていました」というように教職志望に終わりを告げることができずに自虐的な状態が続いた。5～6年ほど教職にこだわり続けるが、他方ではよき先輩の学芸員や専門委員の指導によって、学芸員として必要な技能を学び自信をつけてゆく。また結婚後に夫から「教師に向いていない」と指摘を受けたこともプラスに働いて、教職へのこだわりがなくなり、学芸員としてスタートすることを自然に受け入れるようになる。

このように学部・大学院修了直後に就職した人たちの中には、理想と現実のギャップや、第一志望の職業を断ち切ることができずに不満をもち、それは離職までも考えているが、恩師、上司、夫などのメンターの存在によってその状況を自ら克服していく。

これに対して、博物館関係の非正規職員（アルバイト）として働いた人たちには、このような現象は見られない。それは23人中3人である。財団歴史博物館事業企画課長は、5年間の非常勤職員を経験するなかで新聞記者志望に終わりを告げて、新設博物館の準備室でのアルバイト経験を通して「物質文化はモノに纏わるストーリーを作ることが非常に興味深くなった」といい、他の博物館準備の正規職員に就く。公立歴史博物館学芸グループリーダーは留学から帰国後は、定職がなく博物館展示の企画会社の非正規職員や、その後に国立博物館の非常勤研究員などとして働きながら、自分の技能を発揮できる博物館を模索して続けて、30歳代半ばで博物館に就職した。それだけに覚悟をもち採用者側からの依頼に応じている。財団美術館学芸員は、学生時代からその美術館でアルバイトをして人的なコネクションをつくり、正規職員の退職を待って運よく就職することができた。「（その個人美術館）で、何年間かアルバイトでおいてみると、その中で自分は何が好きなのか、自分にとって何が一番ぴったりくるものなのかが分かってきたんだと思います。そうなってくると、ある意味で迷いはなくなってくるわけで、内定をもらっても自分の中の好みがより鮮明になった」という。その美術館でのアルバイト経験を生かして就職している。

また、初職として博物館関係以外の職業についたが、その後に転職して学芸員に就いた人たちも同じように、この時期に理想と現実のギャップについて悩み進退を考えた形跡は見られない。23人中4人が転職者であるが、彼らの前職は天文機器メーカー、美術センター、魚市場、一般企業である。一般企業に勤務した経験をもつスポーツ博物館学芸員は「最初は辛かったですね。いろんな人を見ていて学芸員として楽しくなるは4年目くらいからじゃないかって気がします。それまではやはり覚えるので精一杯でした。私は前のところは結局辞めてしまったという過去がありますので、それ以上はここに長く居ようと自分自身に言

Hosei University Repository

い聞かせていました。簡単には辞めないぞという気持ちがすごくありました」と述べる。その博物館はスポーツ専門であることから、必ずしも本人が希望する館種ではなかったが、博物館で働きたいという強い意志と覚悟をもち、就職後のジレンマを乗り越えている。

この時期に職業選択をせずに過ごした人は23人中1人である。レビンソンが指摘するように、この時期には青年がもつ二つの発達課題を整理できずに迷うこともある。（イ）おとなの生活への可能性を模索する、すなわち態度決定を保留し、何かに強く拘束されるのを避けて、取捨選択の余地を最大源に残す。（ロ）これと対照的に安定した生活を作り上げる。自分の生活を一応のものに仕上げることである[14]。（ロ）は先述したように、この時期に就職をめざした人たちで、学芸員になった人たちはこのタイプが9割ほどになる。しかし、（イ）と（ロ）とが混在したモラトリアム状態になった者がいることも留意しておきたい。財団歴史博物館学芸員は、卒業後に就職を拒否しているが、当時の学生運動が心理的に影響を与えている。「当時は学生運動のなかにいたんです。卒業時になるとみんな転向していくんです。あの当時の問題は今でも解決はしていません。当時は就職口がいっぱいありましたよね。しかし就職すること自体が犯罪的に思いましたよね」という。全ての人たちが当時の社会的な影響を受けているわけではないが、僅かながらも学芸員にも時代の影響を直接受けてこの時期の発達課題に迷っている。

レビンソンは＜成人期＞について、「この時期の生活構造の発達は安定期と過渡期とが交互に現れて進む。安定期の主要な発達課題は生活構造を築くことである。いくつかの重要な選択を行い、それを中心に生活構造をつくり上げ、その生活構造の中で自分の目標と価値観を追求する。それぞれの安定期にはその時期独自の発達課題がある。安定期は通常6・7年、長くて10年。過渡期は、それまでの生活構造を終わりにして新しい生活構造を築く可能性が生まれる。過渡期の主要な課題は、それまでの生活構造を疑いをもって見直し、自己および外界を変える様々な可能性を模索し、次に続く安定期に新しい生活構造を築く基盤となる重要な選択を行う方法に進むこと」[15]と述べる。この「おとなの世界に入る時期」が終わると「30歳の過渡期」に入ることになる。

5　30歳の過渡期

レビンソンは「成人の過渡期」から「おとなの世界へ入る時期」を経て、それまでの人生を考え直す時期として30歳前後の数年間に「30歳の過渡期（トランジション）」があるという。自分の下した選択についての判断を自問する時期である。この「30歳の過渡期」までの「新米時代」を「一人前のおとなになる過程」ともいう[16]。「30歳の過渡期」はこの過程の最後の段階である。

ひとつには、この時期に正規職員として仕事に就くことがある。しかし、既にその前の「おとなの世界に入る時期」、その発達課題を済ませたひともいるので個人差がある。

県立自然博物館学芸員は大学卒業後にストレートで県立高校の教員になるが、最初の高校で5年、次の高校で8年間勤務後に新設の県立自然博物館に異動希望を出してその準備室に配属される。動機は、知人が他の県立博物館で同じようにその準備段階から日本の博物館をリードするような仕事をしていたので、自分も何年かでも良いから博物館の仕事をやってみたいと思うようになっていたということである。不安はあったが、家族とも相談して決めたことであった。最初の2～3年間は、自分がどのようにしていいかわからず試行錯誤の時代で辛かった。しかし少しずつ経験を積むにつれて、博物館にとって何が大事な仕事なのかが分かるようになり、思うこととやることのギャップを埋めることができるようになったという。博物館への転職は、家族の理解を追い風にして、自分の希望を貫きことができた結果であった。「30歳の過渡期」としては、やや遅れることになるが個人差がある。彼にとっては初職の高校教員に就い

Hosei University Repository

た時期が「おとなの世界に入る時期」に相当する。高校教員の時代のなかで、安定した生活を送りながらも、大学時代に経験した自然観察会を高校でもやりたかったが、それが思うようにできずにいたために、その後の活動の方向性を模索していた。学生時代の知人が博物館で活躍をしていることに憧れていたところ、当時県立博物館の計画があることを知り、それまでの思いを博物館への異動によって実現をはかった。

財団歴史博物館事業企画課長は、先述したように5年間の博物館準備室でのアルバイトを経験して、29歳で正規職員として新設博物館の準備室に就職する。それから8年にわたり開館準備の仕事に没頭していく。「本当によく仕事をしたと思うんです。働き盛りでしょう。当時は二十代後半から三十代の初めでした」という。トランジションは、アルバイト時代に博物館に関心をもつようになり、学芸員として就職ができたことが区切りになる。その後の開館準備は学芸員としての新たなスタートになる。

財団歴史博物館学芸員は、先述したように大学院を修了して郷里の教職採用試験に合格して県文化財保護課に配属されるが、その当時29歳頃であった。それまでの研究所でのアルバイト調査や大学院生活に別れを告げて、出身県の教職を志望したが、文化財保護行政に携わることになる。文化財保護課での4年の勤務を経て、県立博物館の準備室に異動してから博物館との付き合いが始まる。この時期が彼の「30歳の過渡期」になる。最初は、新天地となる文化財保護課での仕事になじめず、国立文化財研究所にアルバイトでも戻ることを考えたが、その後の博物館準備室での仕事にはやりがい感をもって取り組んだという。

公立歴史博物館学芸グループリーダーは、海外留学から帰国してから博物館展示企画会社でのアルバイトの仕事をしていたが、国立博物館の職員と学会で知り合ったことが契機となり、31歳で博物館の教育普及部門の非常勤研究員となる。それは留学時代に学んだことを生かすことができ、何よりも実際の博物館の現場で仕事ができる初めての機会であった。そのときに名刺を持てたことが忘れられないという。

このようには学芸員という仕事に就くことで「30歳の過渡期」を迎える人たちがいる一方、既に学芸員で経験をもちながら、その仕事の延長上で大きな節目を迎える場合がある。県立総合博物館学芸部長は30歳頃に「4,5年経った頃、自分たちの博物館自体の方針上の、なんか方向性がなくなってきた時期があったんですね。要するに毎年同じ普及活動が目的を失ってしまったんです。当時まだ私も若かったですし、実力が無かったからでしょうけど、新しい大きな方針も出せなかったですね」と模索していた様子を述べている。それは本人だけの問題ではなく、博物館組織の問題でもあった。その改革によって、本人は植物の自然担当学芸員になった。樹木を専門にしていたので植物の同定は苦手で最初は困ったが、それから植物を同定することのできる「資料を触れる」学芸員になろうとした。その結果、同僚の学芸員に対しての何か負い目というものを克服できた。ここで大事なことは、本人が問題と思っていたことと、組織全体が取り組むべき課題とも重なっていたことで、その問題解決をはかるなかで本人も技能開発に取り組んで克服をしていることである。このとき改善をしておかなければ、将来にわたって弱点を残したままになり、次の段階で新たな発達課題に取り組むべきことが進まなくなっただろう。この時期に問題解決をしたことは、将来にとって非常に有意義なことであったといえる。

区立美術館学芸員は、美術館の準備段階での公務員研修で福祉センターの職員から美術館の建設予算規模に比べて福祉事業は微々たる予算しかつかないと言われる。それから同じ職員として相手に説明責任を果たすことを考え始める。「その時に初めて美術館ってなんのためにあるんだろうと、考え始めたんですよね」。研修を契機にして、美術館の使命や役割について考えはじめる。「新米時代」からの離陸だともいえる。「人間っていのは必ずどこか心の病むところがある。だから、心のサナトリウムというかそういう風にして社会

Hosei University Repository

で機能していくのが美術館の役割じゃないだろうかってことを、薄々とまた考え始めたんですね。教育普及事業と、ある時からそれは一致してきて、日常生活の中で荒んできてくる気持ちですとか、あるいは忘れてしまった想像力だとか、もともと人間がもっている、創造性や豊かな生活みたいなものは、けっきょく日常生活の中で閉塞されていっていますので、それを何か開放する場所っていうのが絶対に必要だと思ったんですね。それが美術館という場でもあるし、あるいは美術館で行う仕事だと思うんですよ」。彼の場合も、学芸員になってから自らの立ち位置の再確認をはかり、実際の博物館事業を通じて、美術館の役割を確信して再スタートしている。

市立歴史博物館館長補佐は、市職員採用後に5～6年間博物館に勤務するが、それから教育委員会の社会教育課に異動した。そこが本人にとってのトランジション（30歳前後）であった。「（異動について）準備してなかったから大丈夫かなと思いました。ちょっと若いときから生意気なことをするところがありましたから。課長も私のことを十分知っていまして、学芸員としてやっているのも知っていましたが、学芸員だからといって、予算書作成もちゃんとできなくては駄目だと言われました。課長は財政課からきていたものですから、それは徹底的に仕込まれたというか、教育をされたというか、おこられたというか、色々な資料を作ることをしました」。彼は市職員としての一般職採用であったので、博物館と教育委員会を交互に異動したが、この異動はその最初であった。博物館にいると、本庁とは情報不足、人事交流などで距離感ができるものだが、そのことを感じていたのだろうか。本人も異動は覚悟していたであろう。しかしそれが何時かは分からなかった。本人にしてみると、異動は「30歳の過渡期」として、予算書作りなどの市職員の技能習得ばかりでなく、本庁の職員との人脈づくりや市行政の中での博物館業務の位置づけを確認することになった。当時の上司が財政課長として財政課に戻ってから、自分が作った予算書を認めてくれた時には嬉しかったという。

このように「30歳の過渡期」は、博物館での仕事に就き、それを軌道に乗せていくことや、既に学芸員であった人の場合は職務経験のなかでの問題解決を果たしている。いずれもこれを契機にして「新米時代」から離れる。もちろんこの時期に特に際立った変化をもたない人もいる。しかしそのような人は面接調査した23人中3人ほどである。つまり大部分の人たちは、この時期に職業選択をはたしたり、仕事のうえでの課題解決をはかっている。

まとめ

本稿は、学芸員という職業に焦点をあてて、レビンソンのいうライフサイクル（児童～老年期）のうち、＜成人前期＞の人生の発達過程を明らかにすることであった。この＜成人前期＞は「新米時代」とも言われるが、それを構成する「成人への過渡期」「おとなの世界に入る時期」「30歳の過渡期」について検討した。

「成人への過渡期」は、＜成人前期＞に入る準備段階への第一歩を歩むことを意味するが、この時期には大学生活のために自活するものが出てくる。面接調査した23人中7人が学生時代にそうした経験をしているし、さらに2人は海外の大学院に留学している。親元から離れて生活することで経済的に少しずつ親からの援助が少なくなり、精神的にも親への依存度は減っていく。また、職業を志望する時期もこの時期の特徴である。面接した23人中21人はこの時期に職業を志望している。そのうち学芸員を志望したのは12人である。その動機は、博物館全般の活動に関心を持った者が7人、専門研究に従事したいという者が4人、特定の博物館に憧れた者が1人である。それに比べて、博物館や学芸員に関心を持たなかった、あるいは漠然として特に関心をもたなかった人たちは23人中9人である。

「おとなの世界に入る時期」は、職業を選択することが主要な発達課題である。調査した学芸員

Hosei University Repository

にとって職業を選択した理由は、児童期や青年期までの経験に由来することが多いことが分かった。それは能力の養成とも関連する。彼らは天文少年、美術や自然が好きで、新聞づくりに熱中してアイディア開発に磨きをかたり、塾講師で教育力を高めるなどの経験をもつ。調査した23人のうち、学芸員やそれに関連する職業に就く平均年齢は27歳。学部卒業後に就職するまでの期間（大学院期間を含める）は平均4年である。大学や大学院修了直後（大学院中退者を含む）にストレートに就職した人たちは、調査した23人中で正規の学芸員になった者は13名と半数以上を占める。それには、学生時代にアルバイトをしてコネクションをつけていることや、大学教員の推薦などが影響している。しかし、この時期に理想と現実のギャップにより2人が離職を考えている。または第一希望の職業への憧れを断ち切れずに就職したために後悔した人たちも2人いる。しかし、いずれも恩師、上司、夫などのメンターの存在によってその状況を克服していることも分かった。これに対して、博物館関係の非正規職員（アルバイト）として働いた人たちが、その後に正規職員となった人たち（23人中3人）には、このような現象は見られない。初職（正規職員）から学芸員に転職した4人についても同じことがいえる。

「30歳の過渡期」には大部分の人たちが、これまでの仕事の中で変化を経験している。それは博物館での仕事につくことや、既に学芸員として仕事をしていた人たちにとっては、これまで少しずつ模索していた問題や課題を解決することであった。

以上のように、本稿では、学芸員になった人たちにも、主に成人前期において発達過程を明らかにすることができた。しかし、その後のキャリアである中年期への過渡期や、中年期におけるそれは、今回扱うことができなかった。面接対象者の全てではないが、その時期に所属する該当者もいることから、今後とも検討を継続させていきたい。

―注―

(1) 金山喜昭　2009
「学芸員になるまでのキャリアに関する一考察―学芸員22人のインタヴュー調査より―」(法政大学キャリアデザイン学会紀要)『生涯学習とキャリアデザイン』Vol.6, p187-206

(2) ウィリアム・ブリッジズ（倉光修・小林哲郎訳）1994『トランジション』創元社

(3) ダニエル・レビンソン（南博訳）1992
『ライフサイクルの心理学(上)』講談社学術文庫

(4) E.H.エリクソン・J.M.エリクソン（村瀬孝雄・近藤邦夫訳）2001
『ライフサイクル、その完結』みすず書房

(5) エドガーH.シャイン（二村敏子・三村勝代訳）1991
『キャリア・ダイナミクス』白桃書房

(6) （註2）p40

(7) （註3）p24-25

(8) （註3）p110

(9) （註3）p85-91

(10) （註1）p188-193

(11) （註3）p50

(12) （註3）p112

(13) （註2）p51

(14) （註3）p113

(15) （註3）p98-99

(16) （註3）p131